

ひょっこり ほっこり ゾウムシさん

ゾウムシ類（ゾウムシ上科）は日本に1300種ほどいますが、小さい種類が多いため、私たちが野山を歩いてもなかなか出会えません。ここでは忘れた頃にひょっこり出会うほっこりした様子のゾウムシさんたちを紹介します。
★印のあるものは博物館周辺の深田公園で見られるものです。さがしてみてください。

①ミツギリゾウムシ

伐採地で大発生することがあるが、普段は多くない大型種。メスは穴掘り用の細い真っすぐな口吻をそなえているため三つ錐のような体型である。写真は徘徊中のオスで、口吻は幅広い闘争用の仕様。ゾウムシ界のクワガタ？

②ハイロチョッキリ★

夏に現れてドングリの実を食べたり、産卵して切り落としたりする。産卵時に葉っぱのついた枝ごと切り落とすのが特徴。

③トホシオサゾウムシ★

ツクサにいますが、普段はあまり活動的ではなく、活動している時も泥まみれの事が多い。葉の上に変な格好で止まっているのは飛び立つタイミングを見計らっている時のようだ。

④ヒゲナガオトシブミ

アブラチャンなどの葉を巻く。写真のは首が長いのでオス。メスはもう少し短い。体型はゾウというより…キリンです。

⑤コブオトシブミ

溪流沿いのイラクサ科植物に多い。株から株へもよく飛んで移動し、飛んでいるときは黄色っぽく見える。

⑥カツオゾウムシ

川原のタデ科植物でよく見かける、鯨節のような体型で鯨節のように粉を吹いている。粉が多いときは全身がオレンジ色に見える。ヨモギにはハスジカツオゾウムシがいる。

⑦クリアナアキゾウムシ★

表面がゴツゴツした重厚な大型のゾウムシ。クリなどの害虫。森にいる。

⑧シラホシヒメゾウムシ

山地の明るい場所の花でよく見かける。黒に黄星模様のかわいいゾウムシ。でも翅を伸ばすとハエっぽい。和名は白星。

⑨ヒメトゲカタヒロサルゾウムシ

但馬の氷ノ山で2005年に発見された新種。テンニンソウ類にいて、普段は葉の裏に潜み、日暮れ前後に活発に歩き回る。

⑩コフキゾウムシ★

クズなどマメ科の植物に多い小型のゾウムシ。たくさんいると小さく切れ込んだ食痕がよく目立つ。

⑪シロコブゾウムシ★

これもマメ科植物でよく見かける大型のゾウムシ。口吻は短く、後翅がない。飛べないゾウムシ。

⑫アシナガとヒゲボン

アシナガゾウムシ類はのんびりした虫で、長い脚で何かにしがみついているのをよく見かける。一方、ヒゲボンゾウムシ類はせわしく走りまわる虫である。ホホジロアシナガゾウムシの好物はヌルデだが、この写真ではイタドリ葉の先にしがみついている。そこへ通りかかったケブカトゲアシヒゲボンゾウムシは虫を虫とも思わぬ態度。

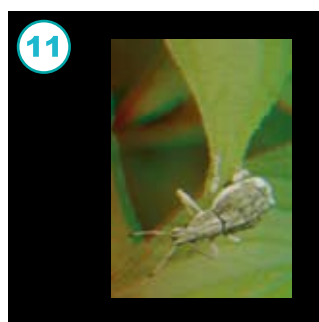
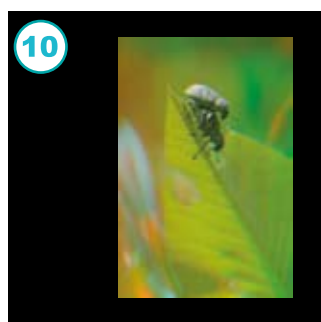
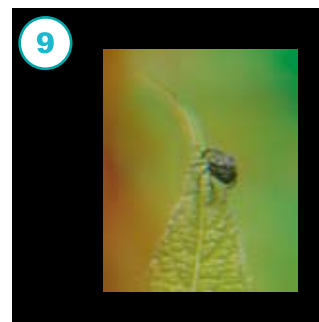
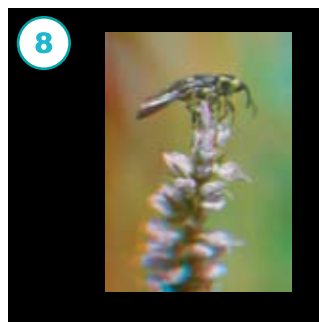
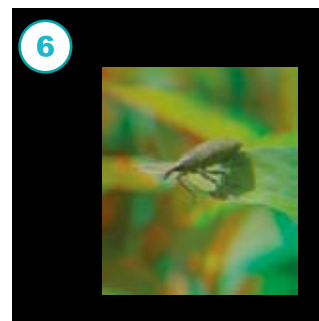
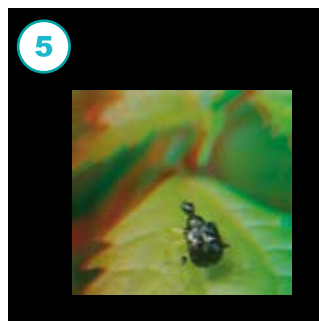
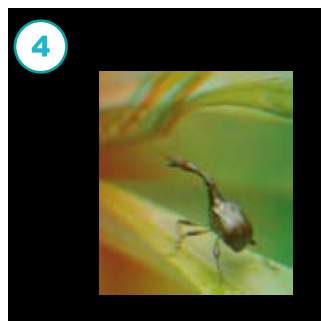
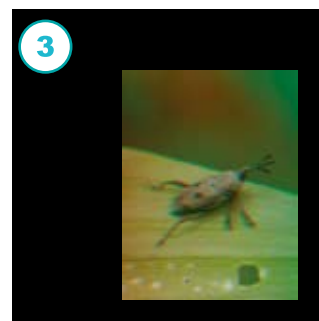
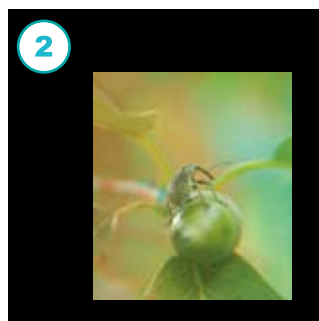
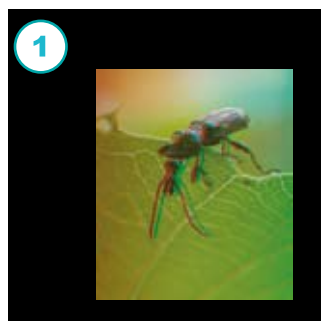
⑬タカハシトゲゾウムシ

サクラ類で見つかる珍しい種。そこらじゅうトゲだらけのパンクな格好で、さらに後脚が物々しい。腿節は膨らんで内側に突起があり、それにノコギリ状の歯があって、その歯の凹みに毛が生えている。これに対応して脛節がアーチ状に曲がっている。これらを使っていったい何をどうするのかは謎。ちなみにオスもメスも同じ格好。

⑭カシルリオトシブミ★

イタドリに多い小型のオトシブミ。金色の胸の渦状の構造が芸術的。オスは前脚が長く、マウントや交尾の際に役立つ。

(沢田 佳久：自然・環境評価研究部)



青赤メガネでのぞくと立体的に見えます。
暗記用の緑と赤の下敷でもOK!



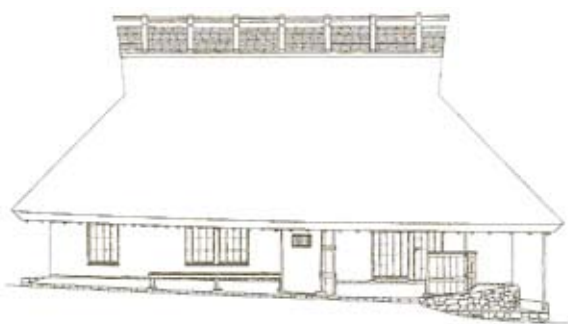
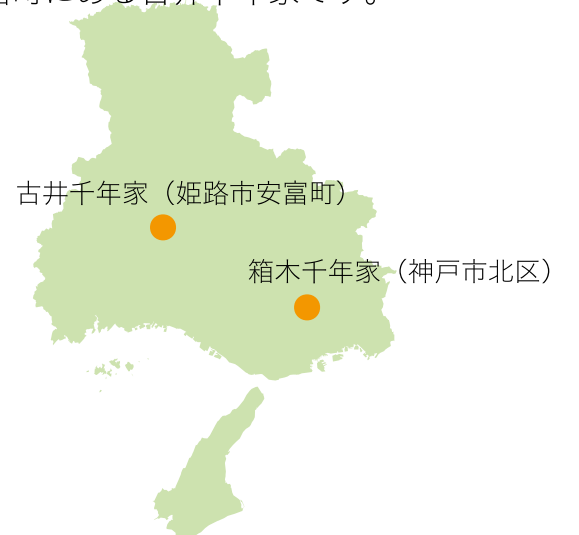
▲箱木千年家（神戸市北区）
▼古井千年家（姫路市安富町）



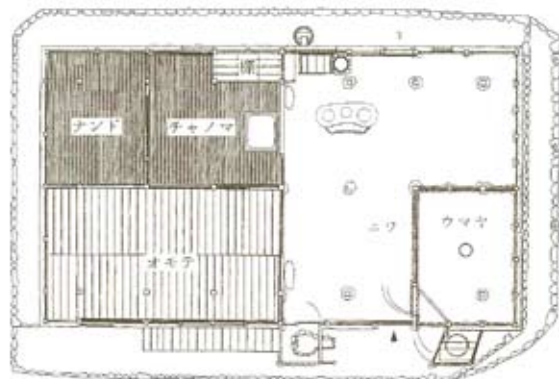
『千年家』って？

兵庫県には、千年家と呼ばれる、室町時代後期につくられた古民家が2つあります。これは全国的にみても珍しいことです。実際は千年も経っていませんが、それぐらい本当に昔からある民家ということです。

一つは神戸市にある、箱木千年家。もう一つは姫路市安富町にある古井千年家です。



古井千年家の立面図（出展：図説民俗建築大辞典）



古井千年家の平面図（前座敷三間取り型）
（出展：図説民俗建築大辞典）

この二つの民家は「前座敷三間取り型」という間取りになっていることが特徴です。近畿地方では、格式の高い民家において「前座敷三間取り型」の民家形式が中世には、成立し、やがて、間仕切りの発達などにより、いわゆる農家の典型的な間取りである田の字のプランである「四間取り型」の民家形式が成立したと考えられています。

夏休みに、約500年前の民家の人と自然の関係の智恵を体験しに出かけてはいかがでしょうか？
（山崎義人：自然・環境マネジメント研究部）